

21 [古文]

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔青森〕

\* いへたかの二位の云はれしは、歌はふしぎのものにて候なり。(言われた) (不思議) (さうらふ) きちょうち  
ち見るに、面白く悪しからずおぼえ候へども、次の日又見候へば、ゆゆ(思われ)  
しく見ざめのし候。これを善しと思ひ候ひけるこそふしぎに候へ、などお(見劣り)  
ぼゆるものにて候云々、とぞ云はれける。誠にさる事なり。(ちよつと)

〔注〕いへたかの二位：藤原家隆。『新古今和歌集』をまとめた一人。二位は、朝廷の役人の地位・序列を示す

〔必〕(1) 「思ひ」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

--

(2) 「面白く」とありますが、ここでそのように思われたのはなぜですか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 歌の鑑賞とは、必ず興味深く感じるはずであったから
- イ 歌を鑑賞するとき、時間を十分かけていなかったから
- ウ 歌の鑑賞では、翌日に見直すことが必要であったから
- エ 歌に興味がないと、鑑賞する価値がないと思ったから

--

〔必〕(3)

「こそ」とありますが、この語の他に用いられている係りの助詞を、本文中から一字で書き抜きなさい。

--

(4) ある生徒が、本文の内容について次のようにまとめました。□に入る具体的な内容を三十字以内で書きなさい。

「いへたかの二位」は、歌の「ふしぎ」について、悪くないと思われた歌が、□ことが不思議だと述べている。


22

〔漢文〕 次の【漢文】と【書き下し文】を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔群馬〕

【漢文】 居<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>広<sub>ニ</sub>居<sub>一</sub>、立<sub>ニ</sub>天下<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>正<sub>ニ</sub>位<sub>一</sub>、行<sub>ニ</sub>天下<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>大<sub>ニ</sub>道<sub>一</sub>。得<sub>レ</sub>志<sub>ヲ</sub>与<sub>レ</sub>民<sub>由<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>、不<sub>レ</sub>□志<sub>ヲ</sub>独<sub>リ</sub>行<sub>ニ</sub>其<sub>道<sub>一</sub></sub>。富<sub>貴</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>淫<sub>ノ</sub>、貧<sub>賤</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>移<sub>ノ</sub>。威<sub>武</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>屈<sub>ニ</sub>。此<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>謂<sub>ニ</sub>大<sub>丈</sub>夫<sub>一</sub>。</sub>

〔孟子〕による

【書き下し文】

天下の広居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行く。志を得れば民と之に由り、志を□ざれば独り其の道を行ふ。富貴も淫すること能はず。貧賤も移すこと能はず。威武も屈すること能はず。此れ之を大丈夫と謂ふ。

〔注〕広居：広い住居のこと。ここでは「仁」をたとえている  
正位：正しい位置のこと。ここでは「礼」をたとえている  
大道：大きな道のこと。ここでは「義」をたとえている  
能：できる 淫：心をかき乱す 威武：権威・武力のこと

〔題〕(1) 「立 天下之正位」に、【書き下し文】の読み方になるように返り点を書きなさい。

立	天	下	之	正	位
---	---	---	---	---	---

(2) □に入る漢字一字を、本文中から書き抜きなさい。

--

(3) 「大丈夫」とありますが、本文から読み取れる「大丈夫」とはどのような人物のことですか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 場面や相手によって、態度が変化する人物。
- イ どのような状況でも、信念を貫き通す人物。
- ウ 苦しい立場でも、物事を楽観的に捉える人物。
- エ 身分に関係なく、相手を優しく包み込む人物。

--

23

〔古文〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔富山〕

実否を知らざれども、故持明院の中納言入道、或時、秘蔵の太刀を盗まれたりけるに、侍の中に犯人ありけるを、余の侍沙汰し出して、参らせたりしに、入道の云はく、「これは、我が太刀にあらず。僻事なり」とて、返したり。決定、その太刀なれども、侍の恥辱を思うて返されたりと、人皆、これを知りけれども、その時は無為に過し。ゆゑに、子孫も繁昌せり。

〔注〕故持明院の中納言入道：一条基家のことであり、入道はここでは僧の姿でありながらも世俗的生活を行っている者  
繁昌せり：栄えているのである  
僻事：俗なほ、心あるは、かくの如し。況んや、出家人は、必ず、この心あるべし。

〔正法眼蔵随聞記〕による  
侍：貴人の家に仕える従者。ここでは中納言入道に仕える者

〔題〕(1)

「参らせたりし」の主語に当たるものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 入道
- イ 太刀
- ウ 犯人
- エ 余の侍

エ
---

(2) 「返したり」とありますが、人々はなぜ中納言入道が太刀を返したと考えたのですか。その理由として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。





矢をばけて…矢を弓の弦にかけて  
左右なくも射す…すぐには矢を放たないで  
ゆゆしかりける…すばらしかった

- ① 「いひければ」の主語である人物と、同じ人物が主語であるものは、本文中の二重傍線部(——)のうちどれですか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 足らざりければ      イ 尋ねければ  
ウ いふを                エ 聞きて

- ② 「いづれかはこがれたる」の解釈として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア どのトキをお望みか  
イ いつかはトキを頂けるのだろうか  
ウ いつトキをお望みか  
エ どのようなトキを頂けるだろうか

- ③ 「なほも」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。また、あとのア～エのうち、波線部(~~~~)が現代仮名遣いで書いた場合と同じ書き表し方であるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 力をも入れずして  
イ よろづの言の葉とぞなれりける  
ウ 老いを迎ふる者は  
エ 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば

## 26

〔古文と漢文〕

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔大阪B〕

ある人白楽天の三儀とて語りしは

一日 計 在 鶏 鳴 鶏 鳴 不 起 日 課 空  
① 計はけい、鶏はけい、起はき  
② 鶏はけい、起はき  
③ 朔はせつ、立はたて、一月はいつげつ、空はくう

一年 計 在 陽 春 陽 春 不 耕 秋 実 空  
計はけい、陽はやう、春はしゅん、耕はかう、秋はしゅう、実(み)はじゆつ、空はくう

といへる語、まことにただ人は心に油断おこるにより、よろづにくゆることもわざわひもおこるとかや。

(注) 白楽天…中国唐代の詩人 三儀…ここでは、日常生活の三つの規範のこと。  
 鶏鳴…一番どりの鳴くころ 朔日…各月の最初の日。ついたち  
 陽春…暖かな春の季節。陽気に満ちた春

- ① 「計」とありますが、この言葉の本文中での意味として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 計画    イ 計量    ウ 合計    エ 余計

- ② 「不起」を書き下し文に直し、送りがなも含めてすべてひらがなで書きなさい。

- ③ ③に入れるのに最も適切な漢文を、漢字六字で書きなさい。ただし、送りがな・返り点は書かないこと。


- ④ 次の会話文は、恵里さんと優一さんが本文を学習したあと、本文について話し合ったものの一部です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

恵里 「上六大夫」がトキを射落とした時、「むつるの兵衛の尉」は「不審をいたし」たと書いてあったね。何を不思議に思ったんだっけ。

優一 本文からは、「A」の上空に到達するまで、「上六大夫」がトキを射なかったことを不思議に思ったと読み取れるよ。

恵里 どうして「上六大夫」は射るのを遅らせたのかな。

優一 本文を読むと、もし射るのを遅らせたかったとしたら、射たトキが「B」でしまつて考えたからだということになるからだね。

恵里 そうだね。トキの羽の状態にまで配慮して射落としたという話を通して、「上六大夫」が「C」ということを描いているんだね。

- (a) Aに入る最も適切な表現を、古文中から五字で書き抜きなさい。


- (b) Bに入る最も適切な表現を、古文中から四字で書き抜きなさい。


- (c) Cに入る最も適切な表現を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 弓矢の扱いを人に教えるのが上手だった  
 イ 弓矢の勝負では常に相手を上回る結果を残していた  
 ウ 射落とす鳥にも情けをかける人物であった  
 エ 遠くからでも自在に射当てる技量を持っていた

--

- ④ 本文中で述べられていることがらとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 先のことばかり心配していると、目の前にある絶好の機会を逃してしまつたため、うまく仕事が進まないということである。  
 イ ものごとは最初が肝心であり、気をゆるめて最初に心を配らなければ、後悔したり、災難にあつたりするということである。  
 ウ 最初だけが重要であると考えて後のことを考えずに油断をしていると、災難のときにうまく対応できないということである。  
 エ 何事も終わり方が大切なのであり、終わったからといって油断していると、次に生かせず様々なことに後悔するということである。

--

## 27

〔漢詩〕

次の「書き下し文」と「漢詩」を読んで、あとの問いに答えなさい。【漢詩】は一部返り点を省略したところがあります。〔兵庫〕

【書き下し文】

北固山下に次る

王湾\*

客路青山の外

行舟 A の前

潮平らかにして兩岸闊く

B 正しうして一帆懸かる

海日残夜に生じ

江春旧年に入る

郷書何れの処にか達せん

帰雁洛陽の辺